

W・R・ランバスにおける宣教思想の一考察

―特に、朝鮮認識を中心に―

洪 珉基（関西学院大学大学院 博士課程後期課程）

はじめに

本論文は、一九世紀後半から二〇世紀初頭に亘って、米国の南メソヂスト監督教会の宣教（師であり、宣教局の主事及び監督などを歴任したW・R・ランバス（Walter Russell Lambuth、一八五四―一九二二）の朝鮮認識と理解に関して、考察することを目標とする。ランバスの宣教の痕跡は今も世界の所々に残っているが、彼は東アジアにおいて、日中韓の三国すべてと関係を結び続けた。しかし、その中でもランバスが朝鮮に残した宣教活動と痕跡はまだ十分に解明されなかった点が少なくない。^①ここでは、ランバスが朝鮮について、どのように理解したのか、ランバス自身が残した文書や当時の新聞などを通して検討する。そして、急速に変化している今日の時代の中で、ランバスにおける宣教思想を吟味し、彼の宣教思想の意義は何であったのかについて考察しようとするものである。

ランバスにおける朝鮮に対する認識と理解

1. 単純な認識から具体的な関心に

一般的に人間の行動はその人の心を通し、外に表れる。それ故、ランバスが朝鮮で残した宣教活動の跡も彼が朝鮮について抱いていた理解、そして行動認識の結果だと見られる。それでは、ランバスは朝鮮についてどのような認識と理解を持っていたのか。

元々、ランバスにとって、朝鮮とは、東アジアの中国と日本の間にある一つの国という単純な自覚にとどまっていたと思われる。このことは尹致昊が書いた日記などを通して、確認することができる。ランバスが最初に出会った朝鮮人は尹致昊であり、二人の関係は一八八五年から始まった。それ以後にも、ランバスは彼と親密な関係を維持し続けた。それにもかかわらず、長い間、ランバスにとって、朝鮮への関心度は外のエリアのような国であった。即ち、朝鮮という国は認識していたが、宣教地として具体的な対象国には至らなかったということである。ランバスが直接に朝鮮に関する関心を持ち、公式的なところで初めて、朝鮮宣教の必要性を主張することになったのは、一八九四年の南メソヂスト監督教会が発行した機関紙 *The Methodist Review* の一一―十二月号においてであった。^② それまで、ランバスは尹致昊との友好関係はあったが、互いに朝鮮の宣教に関して、長い期間密度の濃い対話をしなかったようである。この点は、尹致昊の日記から推察できる。一八九四年の夏頃まで、尹致昊の日記に出てくるランバスに関する記録を参考すれば、その両者の関係を次のようにまとめられる。^③

第一は、ランバスはほとんど尹致昊との食事会によって、対話の機会を得たことである。⁽⁴⁾ 勿論、このような交わりによって朝鮮以外に中国及び日本などの二カ国をめぐる内容が話題になったこともあった。⁽⁵⁾ しかし、朝鮮に対する具体的な宣教方策とその内容は全く出てこない。

第二は、尹致昊は宣教に関する学習会や講座などで、ランバスの講義を聞いたことがあるが、これは直接朝鮮宣教に関することではなく、「宣教師を派遣している米国籍の教会の関心を促す」ことや「宣教報告の具体的な方法」などの一般的な事項に関する内容が主なことであった。⁽⁶⁾

そして最後に、ランバスはこの時まで、米国人たちに朝鮮に対する関心を喚起することより、アフリカ宣教の当為性を力説したり、あるいは自分が宣教師として活動した日本に対して、一層大きな関心を与え、これによる一般の理解を呼びかけた。朝鮮はあまり関心の対象となっていた国ではなかったわけである。以下は、尹致昊の日記の一八九一年一〇月二三日の内容である。

午前九時にヒュープライスヒューズ (Hugh Price Hughes) 牧師が、大学の教会にて学生たちに講演した。午後の会では、いつものように、ランバス博士が誠実で、明確に日本と宣教使命について話した。ランバス博士の次に、アンダーウッド (Horace G. Underwood) 牧師が朝鮮について話した。その次に、中国の宣教地から戻ってきた宣教師であり、神学博士のビーチ (H. P. Beach) 牧師が短く話した。⁽⁸⁾

勿論、二人同士で書簡などが交わされたことは尹致昊の日記によって判明されているが、⁽⁹⁾ 現在残されている資料で、書簡の中に朝鮮宣教に関する細かい事項などが論議されたのかは確認が難しい。しかし、ランバスが尹致昊と交わした手紙の中に、朝鮮あるいは朝鮮宣教をめぐる内容が

具体的に記録されていれば、尹致昊の日記にもその内容の一部が言及されるはずであるが、そのような気持ちが全く日記に書かれていなかったのは、ランバスがこの時まで、朝鮮と朝鮮宣教に關して具体的な計画と関心を持っていなかったと推測することができる。その後、先に言及したように、ランバスは *The Methodist Review* の一八九四年一一—十二月号に *Korea: Past and Present* という題目の文章を寄稿し、南メソヂスト監督教会の信徒たちに朝鮮についての関心を喚起したのである。

それでは、ランバスが朝鮮について関心を持つようになったことはどのような理由であったのか。ここには、ランバスが明らかに記述したところはないが、当時の状況と雰囲気によれば、大きく、次のような二つに整理することができる。一つは、これまで論述したように、尹致昊という朝鮮人との出会いと交際によって、彼が朝鮮に対する関心を呼び起こされたと推測できる。時折、尹致昊との食事と交流などを通して、断片的に朝鮮及び朝鮮人に対する理解と知識を得ることができただろう。もう一つは、彼が南メソヂスト監督教会の宣教局主事の任務を担当していたため、朝鮮について関心を持たなければならないこともあったと推測される。一八九四年までに限定したとしても、北メソヂスト監督教会や長老派などによって、朝鮮に宣教師が派遣されていたが、南メソヂスト監督教会の立場からみると、派遣宣教師が一人もいない宣教地だったのである。そのようなわけで、南メソヂスト監督教会の海外宣教の責任を持っていたランバスの立場からみれば、朝鮮は開拓宣教の可能性を検討することが十分にできる国となれたわけである。従って、彼は朝鮮を知るため、当時の西欧に紹介されていた東アジア、その中でも、朝鮮に關する關係書籍を閲読し、朝鮮に対する理解をより深くし、その宣教における可能性も検討していった。¹¹⁾

このように、ランバスは朝鮮という国が東アジアにある国の一つという単純な認識から、南メソヂスト監督教会が福音を伝える宣教地としてその関心のエリアに入り、これによって、検討の対象となったわけである。⁽¹²⁾

2. 独自の気質と伝統文化を所有した国

最初に、ランバスが朝鮮について興味を持ち始めた時、彼は朝鮮人をいわゆる文化人類学の枠組で分析しようとした。一八九四年の宣教局の主事として在任した時に、彼は次のような文章を書いている。

朝鮮人たちも日本人たちのように混血の血統である。頭蓋骨の輪郭、民俗文化、宗教、そして、特に言語はこのような結論の証拠となる。朝鮮半島の地域の歴史学者たちは私たちに「朝鮮が」恐らく東アジアのツングース人種 (Tungusic race) に属しているが、その起源がわからない原始的な土着部族たちによって、支配されたと語っている。BC 一一二二年頃、学者であり、政治家であった箕子 (Ki Tsz) の指揮の下で、中国から移住し、この土着民たちを大勢圧迫し、侵入した。⁽¹³⁾

ここでは、朝鮮人の始祖を中国から渡ってきた箕子であるとみているが、朝鮮人が、単一の民族ではなく混血の民族かどうかについては異論の余地がある。彼が朝鮮側の文書ではなく、西洋人によって書かれた書籍を参考したことは、既に中国と日本宣教師を歴任した彼の経験からすれ

ば、このように理解することは無理はないと考えられる。このように、初期において、彼の朝鮮及び朝鮮人の理解は東アジアという大きな範囲の中で、理解しようと試みた痕跡が見られる。彼はまた、朝鮮人の気質を周りの環境との相関関係の中で調べ、理解している。

十一月の秋、日出 (sun rise) と日没 (sun set) で、いついつの古い山々が鮮紅色の色を帯び、その後、赤色を見せる際に、これを見る自身が神に真つすぐ進む道に上り、もつと高いことを思うように創られる。私は朝鮮人たちが持つている強い気質 (the strength of character) の中の一部が、彼ら自身の頭の上の最も高い所に位置した要塞がある巨大な山々に由来していると思う。しかし、ついにその精神は心を変え、人生を清くする永遠の坂道を提供してくれる。⁽¹⁴⁾

ランバスは険しい山脈が多い朝鮮の自然環境を見ながら、朝鮮人の気質が自然によって影響を受け、形成されたとみた。しかも彼が言及したいわゆる、強い気質の中の一つはまさに独立の精神である。

くねくねしつつも、ぐっとそびえ立った山脈はこの王国の全体の枠と規模を示しているが、短い東部と長い西部の流域として分れ、色々な川に流れ、谷を豊かにし、豊かな産物をもたらし、三〇〇〇年の間に、外勢の継続的な侵略の中でも、この国民たちの中に生きている独立の精神 (spirit of independence) を支えてくれた。⁽¹⁵⁾

昔から朝鮮人は険しい自然環境の中で、独立精神という強い気質が形成され、この気質を本質

的に持っているので、外勢に抵抗しようとする意志が誰より強かったことをランバスはよく理解していたわけである。従って、彼は後により具体的に叙述するが、朝鮮人の外勢に向かう抵抗と独立の精神をよく理解することができた。

一方、独立の精神以外に彼が見出した朝鮮人の他の姿は、相互に助け合おうとする民族でもあった。

このように純真な (simple-hearted) 人々「朝鮮人たち」は互いに助け合い、働くことが好きだ。春に、田植をする時や、秋に刈り入れをする時に、彼らは互いに助け合い、共に働いた。長いシャベルで土を掘る時にも、彼らはたびたび共に働くが、八人あるいは一〇人の作業員が共に働く時に、ちょうど一人がシャベルを掘るようである。ところが、この際に、四人あるいは五人以上の人々がそれぞれ横に稲のような物によって、しっかりとくくられている稲束を持っているが、彼らはリーダーが四音節の歌を歌うまで待っていて、作業場にて引張り、振り、投げることを繰り返す。：リーダーは初小節を繰り返し、すると、人々はそれをまた繰り返して、次に、彼らは共に合唱する。このような方法で、朝鮮人たちは多くの大変な仕事を軽くして行く。⁽¹⁶⁾

ランバスが朝鮮を訪ね、純真な朝鮮人たちの協同の精神を称えたのは、田舎で互に助け合う姿を見たからである。しかし、彼が褒め称えた朝鮮の文化はそれだけではなかった。彼は京城（今日のソウル）の主な通りを行き来しながら、その風景を細かく観察したが、彼は市場が繰り広げられている形に中国の北京の街との類似性を見出しながらも、いわゆる、荷物を運ぶチゲツクンたちが行き来す光景は朝鮮の街独特の点として描写している。⁽¹⁷⁾ 市場で韓紙 (Korea paper) を売っ

ている店に彼は立ち寄り、販売されている品などを見て次のような印象を描写している。

道に沿っていく内に、「京城にある」我が宣教部 (mission house) から遠くない所には韓紙の店がある。朝鮮人たちは、その優れたオイルペーパーに文を書くのである。その大きなペーパーは板の床に敷かれ部屋の全体をいっぱい上張りされるほどのサイズもある。この品は垢が軽く落とされ、綺麗によく維持される。扇 (fan) も同じ材料で作られるが、良い竹の細くて、長いものの上に糊をつけて用いられる。扇は本当に堅固で、紙は非常に良いオイルをつけて用いるが、ほどほどに水に少しつけても良く、店の前、あるいは、裏庭や板の間のため、スプリンクラー (sprinkler) の役割として愛用されている。朝鮮人たちはこのような紙の製作技術を日本人たちに教示した。⁽¹⁸⁾

ランバスは、南メソヂスト監督教会へ行く途中宣教部の近所にある韓紙の店にしばらく立ち寄り、朝鮮人たちが得意とする多種多様な文化を観て、その優秀性を認めた。そして、このような優れた紙の製作技術が既に日本に渡って行き、日本文化にも影響を及ぼしたということも認めている。

「新羅時代における朝鮮半島の」東部の海岸から仏教の僧たちと儒学者たちが日本に渡っていき、自分たちの信仰を紹介した。従って、宗教と哲学は中国の芸術や科学、朝鮮半島の政治のシステム、法制 (jurisprudence)、音楽、医学、穀物、茶、そして、シルク文化 (silk culture) が朝鮮という架け橋を通して、紹介され、「朝鮮半島は」日中の強力な媒介となった。⁽¹⁹⁾

朝鮮は自分たちの技術と文化を直接日本に教示したこともあるが、中国の文化も勿論、朝鮮が架け橋の役割を担い、伝えたことをランバスは既に知っていたわけである。

このように、ランバスは朝鮮に関する書籍により、すでに朝鮮を訪問することにより、福音を宣べ伝えるために、朝鮮人に関する日常の朝鮮文化と理解を深め、努力した姿が見られる。そして、時折、朝鮮の伝統文化や技術などに優れたものを見出せば、これを卒直に認めるのであった。

3. 歴史的な痛みを抱えている国

ランバスは、朝鮮文化と歴史を理解する中で、彼が見出した朝鮮は歴史的な痛みを抱えている国であった。この点は朝鮮の女性たち、いわゆるスゲチマ（被り物スカート）をめぐる文化の由来を調べ、記述した彼の言及から明らかである。

このことは、私が昔朝鮮が敵から続けて侵略を受けたという物語を聞いて、知るようになった内容である。中国の軍人たちが朝鮮のあるところを侵略してくると、日本はその反対のところを侵略してきた。すると、朝鮮人たちは彼らに対抗しながら戦った。朝鮮人たちは戦闘に参加するため、鎧を着て、弓と矢、そして、槍を持ち戦った。彼らが毎回に鎧を着られなくなり、民を保護したり土地を守らなくなったので、女性たちが万一の場合には、彼女らの旦那と息子たちに、素手で準備した戦争の武器を伝えようとした。その際に、女性たちはまるで、一つの鎧となっているように、彼女らの頭に緑色、あるいは赤紫色の長いチマ（スカート）を被り始めたが、彼女らのあまりに古く、いつもの癖のようにになっていたこの習慣的な方法が、自分たちを守る

ための方法となったわけである。これは非常に奇妙であり、なかなか信じられない物語り (queer story and hard to believe) である。⁽²⁰⁾

朝鮮時代に、朝鮮の女性たちが外に出掛ける度に、被ったスゲチマについての内容であるが、ランバスは中国及び日本から侵略された朝鮮の歴史の中に、いわゆる、「奇妙であり、なかなか信じられない物語り」を知ることになったのである。ランバスが知ることになった朝鮮文化の内には、このように朝鮮が外勢に侵略されたことによって、形成された文化的な要素があった。それほど、ランバスは朝鮮を理解する時、外勢によって侵略された歴史的な痛みと苦痛を無視することができなかったわけである。そのようなわけで、ランバスは自分が書いた朝鮮に関する文章の中に、朝鮮の民族が経験した外勢からの侵略の歴史をよく言及した。何より、前の引用文でわかるように、朝鮮の隣国、すなわち、中国と日本によって受けた侵略の痛みをランバスは十分に理解していたのである。

歴史的な事件は大きな円の中で循環する。アジアの歴史の中でも、これが繰り返される傾向がある。中国とその反対側の日本という強力な敵の侵略によって、朝鮮半島は昔から揺らいできた。…本当に、この東方のポーランドと言えるここ「朝鮮半島」は非公式的な隣人たち、そして、保護膜となる勢力の下で、受けた苦痛よりも、むしろ自然の手による苦痛の規模がもっと弱かったと言える。⁽²¹⁾

ランバスは、朝鮮をアジアのポーランドとして比喻した。西洋、特に、米国人たちに朝鮮を説

明するため、ヨーロッパの列強の中、長い間侵略によって、苦しんだポーランドがどのような比喩よりも適切な指摘であった。続いてランバスの言及である。

どのようなことも比較できない国家的な苦痛が残された記録の痕跡を、ちょうど「中国と日本という上下の挽き臼の間に置かれた一握りの穀物」(the grist between the upper and lower millstones of China and Japan)のような貧困な朝鮮をもう一度調べて見るように、もう一度言及する必要がある。豊臣秀吉、あるいは太閤様という人は一六世紀に貧しいところで生まれ、田舎で育った人である。傲慢な意欲に捕われ、貪欲な野望と生まれつきの勝負の気質を持っていた彼は、日本の軍事的な指導者として起こした。彼は続けてプレゼント(恐らく、公物である。)を渡す朝鮮の使節団(envoys)が怒るように、刺激であり、中国を征伐するため、最善を尽くす方法として、朝鮮半島を利用するための彼の目的を公言して、日本が正当な理由がない無慈悲な侵略の戦争を目指すため、刺激した。まず、選ばれた約八万人の軍隊を導いていた豊臣秀吉の將軍たちは、はじめに、朝鮮の山城を成功的に圧迫し、鴨緑江(Yalu River)まで進めた。…日本の京都を訪ねた旅人たちはヤアミホテル(Yaami Hotel)のミールの南の中央に、ざっと枠組みだけあり、碑文が書いている石碑が立てられている丸みの土の墓を見られると思う。それは耳塚という物で、野蛮的な戦闘の残忍なことを思い出されるようにさせる。戦利品として、南原城を取り囲み、攻撃して殺した三、七二三人の中国人たちと朝鮮人たちの首を切ったように、切った耳は石灰水(lime)と塩に漬けにして、壺に入れ、豊臣秀吉の侵略戦争を自慢するための残酷な成果として、捧げられたが、この物が日本から取り戻すことができなかった。⁽²²⁾

ランバスは文禄・慶長の役の時、日本が朝鮮を侵略し、朝鮮民族が受けた苦痛についてもよく

わかっていた。特に、朝鮮人たちの耳を切り、戦利品として、豊臣秀吉に捧げた日本人の残酷性、逆に、朝鮮人の痛みを共感していたわけである。そのような意味で、ランバスが理解していた朝鮮とは歴史的な痛みを抱えていた国であり、これは「中国と日本という上下の挽き臼の間に置かれた一握りの穀物」という表現として、適切に解釈された。彼は、このような表現を晩年まで用いた。

朝鮮人たちは多くの苦痛を耐えてきた。何世紀の間に、彼らは上の反と臼の間の搗く穀物 (as grist between the upper and neiter millstone) のように、置かれていたのである。朝鮮人たちは彼らの官吏たちによって、⁽²³⁾ レモンを絞るように、圧迫されてきたし、ある時点からは、中国人たちと日本人たちによって、搾取されてきた。

さらに、ランバスが生きていた時点（一八九四年）にも、朝鮮は日本と中国によって、干渉と侵略を受けている国として見られた。

中国は朝鮮に完全な自治権を付与するという声を出しているが、彼らが東京「ベトナムのハノイの昔の名称」と安南「ベトナムの中部にあった昔の王国の名称」に対してそうであったように、「好意的な宗主権者」(benevolent suzerainty) という態度をとる。一方、日本は商業的な利権の保護を首都「京城」にて、彼らの一定の目的を達成し、多数の軍隊を上陸させ、「朝鮮の」王の個人の安全を守るという名分の下にある。このすべてのことの裏で、まるで、日本が二〇年間、互いに敵意を抱え、睨み合い、あるいは、向かい合い (face to face) ながら、彼らが東方の波 (eastern waters) の中で、覇権を握るための戦いを静かに準備していたように、「中

国と日本」両方はそのようにいたわけである。⁽²⁵⁾

勿論、ランバスが注視した昨今の朝鮮とは、中国と日本の間だけで、苦痛に遭うそのような国ではなかった。一八八五年から八七年まで、巨文島⁽²⁵⁾ (Port Hamilton) を侵略し、占領した英国と朝鮮半島の周りで勢力を戦ったロシアの間の軋轢、一八六六年と七一年に、それぞれ江華島を侵略したフランスと米國に言及しつつ、西洋の列強によって続けられた侵略の中で自由になることができなかったし、苦痛を耐えなければならぬ朝鮮の現実を、彼は十分共感していたのである。そのようなことが朝鮮に対するランバスの主な認識の中の一つであった。ランバスがまさにそのような認識を抱いていたので、彼は朝鮮民族と朝鮮教会を慰めることができた。特に、三・一独立運動のため、ひどい苦痛を味わっていた朝鮮人たちを誰より積極的に慰めることにおいて躊躇しなかった。次は、これに関連してランバスが言及されている尹致昊の日記である。

咸鏡南道の元山に来ていた。午前にも南メソヂスト監督教会の朝鮮年会が続開された。ローリングス博士と話し合った午後三時から、雨が降った。道はぬかるみとなった。ランバス監督らは年会の朝鮮人の代表たちとの懇談会で、建議事項を要請した。ある人々は独立運動が発生した後、地方の警察に受けた迫害について話した。ある二人が監獄にて苦痛に苛まれている人々のため、祈ろうという話を切り出したとたん、部屋中が涕涙雨のごとしの状況に一変した。⁽²⁶⁾

ランバスは朝鮮教会の教職者および指導者たちと会ったところで、三・一独立運動のため、受

けていた苦痛を直接聞いた。朝鮮人たちが泣きながら、大声で祈っている姿が、ランバスにとっては非常に衝撃的であつただろう。従つて、ランバスは朝鮮総督府による苦痛の只中にいる朝鮮人たちと朝鮮教会の姿を東洋の担当監督として、ただ無視することができなかった。しかも、彼は朝鮮民族が受けた苦痛の歴史を十分知っていたわけである。彼は朝鮮教会の要請などを聞き、これを自ら実践することにした。

二五日、「クラム」博士とランバス博士はサンフランシスコの朝鮮人教会で説教したが、真理と愛と服役は勝利の唯一の要素と前提ということをはっきり証明し、内地で行われた苦痛の中において、日増しに、真理と愛のため服役する同胞らのために、祈つてくださいとアドバイスしたそうだ。⁽²⁷⁾

彼は翌年に開かれる第三回の南メソヂスト監督教会の朝鮮年会を主宰するため、朝鮮に向かつて出発する前に、まずサンフランシスコにある朝鮮人教会に寄り、祖国にて独立運動などで、服役され、苦痛の中にいる同胞らのため、激励や（信仰的な）アドバイスとしての説教をしたのである。そして、朝鮮に着いても、独立運動のため、苦痛の中にいる朝鮮人たちと教会に対する慰めのメッセージも忘れなかった。次は、『東亜日報』の記事である。

歓迎会にて、ランバス監督の断想

一七日の夜八時に、宗橋礼拝堂にて、今回の南メソヂスト監督教会の「朝鮮」年会に参加するために、米国から来たランバス監督と「ディキンソン」、「スチュワード」という二人の博士を歓迎するため、市内の南メソ

ヂスト監督教会の各教会がそろい盛況となった。具滋玉氏の司会で、張錫煥氏の歓迎辞があつたし、お客様に記念品を与え、その後、ランパス監督の講演があり、彼の雄弁は一般の聴衆を感動させたが、その内容は、現今の朝鮮人は過去に通つた歴史の道筋を後にして、未来という前に向つて心が開かれるようになって、学習意欲を向上させ、男女学校がその志願者をすべて収容することができないこの時に、である。このような有望な時代は、朝鮮の歴史において、最初となるわけである。「ランパス」自分がいつの日か近い未来に朝鮮にまた戻れば、「朝鮮教会が」満州、シベリア、アフリカのような外国に行き、伝道に熱意のある人々が多いことを見たいと言つたが、朝鮮人のように苦難を経験した人々が他にどこにいるのか。シベリアに行けば、容易に逮捕され、刑務所に行く場合もあり、朝鮮人のように入獄した経験が多すぎるのは他国にない。アフリカに行き、伝道すれば、八、九〇〇マイルを歩き、猛獣と戦わなければならない。だが、朝鮮人のように潔く、虎をよくとる人が一体どこにいるか。あの信者の金氏「金インウォン」は一生涯自分の手で一〇頭の虎を獲つたということを聞いたそうだ。⁽²⁸⁾

朝鮮教会の歓迎会の席で、彼はある感想を言つた。これまで、朝鮮人たちが受けた歴史的な痛みを共感し、特に、三・一独立運動によつて、まだ刑務所で苦痛の中にいる兄弟たちを慰めた。ただ、朝鮮教会の要求を聞いたことだけではなく、公の場で積極的に慰めの一言に言及したわけである。この日、参加した朝鮮人たちはランパスの講演を聞き、多くの慰めをもらった。ランパスのこのような言及は、翌年にも続いた。次は、一九二一年六月三〇日の『新韓民報』の記事である。

朝鮮人の信仰は世界の第一

ランバス監督の実験談

本月一九日本港「サンフランシスコ」の朝鮮人礼拝堂にて、アクトン [Acton] 牧師が説教したが、その中で、南メソヂスト監督教会の監督であるランバス氏が朝鮮に行った時に、監獄にいた南メソヂスト監督教会の信徒の四人を訪れたエピソードを伝えてくれた。たと言語が互いに違っていても、我が内地の同胞らのキリスト教に対する信仰が非常に強く、ある一人は圧迫されているが、教会はますます復興していると。⁽²⁹⁾

当時、監理師 (superintendent) として、サンフランシスコの地域教会を担当していたアクトンは朝鮮人教会にて、昨年 (一九二〇年)、朝鮮に行った時、監獄にいた信徒たちを訪れたランバスの経験を伝えてくれた。たとえば、第三者の口を通して、伝えられた経験談であるが、実際にランバスが独立運動によって、監獄で苦痛の中にいる朝鮮人たちを訪れ、慰めたことが明らかである。しかし、逆には日本の統治が行われていた只中で、朝鮮人たちを慰めたその行動自体が、日本の当局を刺激した。そのようなわけで、日本の当局が時折ランバスの行動を注視し、監視したことも事実である。⁽³⁰⁾ それほど、ランバスは日本に圧迫されている朝鮮人たちの痛みを理解し、慰めたのであった。

4. 西欧文物による近代化の必要性

ランバスは、朝鮮文化と歴史を深く理解しようとしたと言える、とりわけ、朝鮮半島が侵略の激戦地であったので、彼は日本に抵抗しつつ独立を勝ち取ろうとした朝鮮人たちの心に共感する

だけでなく、監獄にいる朝鮮人たちをしばしば訪れた。このように、ランバスは朝鮮文化の独自性を認め、その優秀な文化をことの他、積極的に褒め称えた。それと同時に、朝鮮の伝統文化と文物は、朝鮮が発展することにおいて限界性があると思つた。朝鮮の伝統文化の中に、迷信的であり非人倫的な要素が入っているという考えを拭うことはできなかったからである。

太祖の李成桂は、朝鮮を現在の行政システムの基盤となっている八つの道（区域）として分けたが、この体系は中国をモデルとし、社会と宗教において改革を推進し、これを実行させた。仏教を崇めた制度を廃止させ、僧と寺の土地は没収された。呪術と精霊に侵されたシャーマニズムが一般大衆に広がっていた時に、一方、儒教は国家宗教となつた。その結果、競争による試験を通して、文武の高位官吏まで上ることができ、内政システムの改革のベースになつた。この王朝は生きている老人を埋葬する高麗葬という風習、あるいは、自然の前に生きている人間を供え物として捧げる人祭という慣習を永久に廃止させた。千年以上の長い時間の間に、仏教は彼らにとつて慈悲と威勢をふるっていたが、脅威となつていたこの国から悪習慣を除去することが出来ないでいた。⁽³¹⁾

たとえば、朝鮮時代に生きている老人を捨てる高麗葬という風習、そして、自然の前に生きている人間を供え物として捧げる人祭が廃止されたとしても、朝鮮文化の中に、その痕跡が依然として残っていることを見出したランバスにとつて、朝鮮は迷信的であり、非人倫的な要素が入っている未開な国であつた。すなわち、当時、西洋社会では女性の社会的地位は男女とも同等であつたが、朝鮮の女性はランバスの目に、社会的に劣悪な立場に置かれてしていると映つた。

朝鮮には三〇〇年前に、三人の賢者 (sage) が分かれた土地から出てきたという昔の伝説のような物語りがある。ここは濟州島 (Quelpart) というところで、最近には朴泳孝が流罪に処されたところである。それぞれの賢者らはポニー、子牛、豚、犬、そして、妻が入っている大きな箱が南の方に漂っていることを見つけた。この物語りでポニーが最初に選ばれ、かわいそうな妻は最後であった。ところが、このようなことは未開な国々 (heathen countries) で、よく現れる女性たちの状況である。幼い少女たちは大概名前を持っておらず、単に「一二三」という数字と呼ばれるだけである。女性として成長しても、「誰々の娘」 (the daughter of so and so)、あるいは、「誰々の姉妹」 (the sister of so and so) と呼ばれるだけである。⁽³²⁾

動物にも劣る女性の状況を皮肉るような朝鮮の昔の物語り、そして名前すらない朝鮮の女性たちの位置に言及し、彼は朝鮮を未開な国々 (heathen countries)⁽³³⁾ の一つであると見ている。さらに、朝鮮社会の競争によって、一般の民衆が苦しんでいることにも言及している。

アジアの患者 (the sick man of Asia) という朝鮮は、党派争いによって、苦痛と涙の中にいる。「朝鮮の内政は進歩派と保守派が王権の周りで互いに争ったように、極めて無秩序の中にある。朝鮮人の官吏たちの失政と不当な要求は、東学党の指導者の下で、朝鮮半島の南の方の農民暴動の原因になった。」⁽³⁴⁾

ランバスは朝鮮を「アジアの患者」と表現した。彼は官吏たちの不正と腐敗も非常に多いと思った。続く彼の言及である。

ある地方に、若干の土地と牛の一頭を持っていたある農民がいた。彼について聞いたことがある道知事は彼を地方 (district) の名誉官吏として任命した。高位官吏 (magistrate) の部下たちはその農民に任務を任せ、彼に何かのおもてなしを強要した。鶏と卵を全部食べてしまったし、道知事に捧げるための賄賂を要求した。むしろ、その貧しい農民は非常に苦しみを受けながら、その不当な要求に応えるため、土地と牛を売らなければならなかった。愚かにも、土地と牛を売った彼は、道知事の貪欲の中に置かれたし、道知事はまた他の財物を摂るため、同じような方法で、彼に繰り返して苦しめた。⁽³⁵⁾

このような状況のため、ランバスの目に見えた朝鮮社会はますます疲弊していくだけである。しかも、(西欧文物によって) 近代化されている要素も朝鮮社会には見出されなかった。次は、彼が一九〇七年頃に京城の街を歩きながら、感じた感想の一部である。

ハッパ笠 (high-top hat) を被り、韓服 (long linen robe) を着て、キセルを吸っているある老人が営んでいる店があるが、彼は座って、医薬品を売っていた。老人の前に置かれているテーブルの上にはあらゆる種類の根 (root) と薬草 (herb) があった。あなたが来て、よく見ると、もし、あなたが怖がり人であり、小心な性格を持っている人だったら、あなたに勇気を与えるための虎の骨も勿論見られるし、もし、あなたがリユーマチスのため、苦しんでいれば、元気にするため、用いられている「虎の」栄養粉末 (antelope powder) を、そして、もし、腹痛 (stomach ache) のため、苦しんでいれば、お湯に入れて、混ぜてから、飲むムカデの粉末 (powdered centipedes) を見られると思う。このようなものは一般人が医者のような役割を行っている朝鮮の伝統治療法である。⁽³⁶⁾

虎の骨とムカデの粉末などが朝鮮で、医薬品として用いられていることと、しかも、熟練な医者ではなく一般人によって、薬品販売と医術が行われていることが、医者でもあったランバスにとって非常に衝撃的なことであった。そのようなことが朝鮮を未開な国として見るしかない理由となった。しかし、彼は朝鮮が常にいわゆる、未開な国に留まらないだろうと予想した。続く彼の文章である。

この街の奥にある城郭の門を通して行けば、アビーソン (Dr. Avison) 博士が営んでいるミッション病院 (Mission Hospital) があるが、そこには貧乏な朝鮮人の患者たちがムカデや虎の骨などがなくても、最高の診療と外科手術を受けることができる。向こうの所々に入ってみたが、熟練な看護師たちがベッドの周りを静かに行き来しながら、看護しているし、キリスト者の医者が「患者たちの」痛みを止めさせ、病気で苦しんでいる朝鮮人の患者たちの命を助けるため、喜んで頑張り、手伝ってあげていることが、大きな幸いであった。⁽³⁷⁾

この引用文で、言及されているミッション病院は当時の京城の南大門のすぐ外にあったセブランス病院 (Severance Hospital) を示す。ランバスの目には、非常に野蛮と思える朝鮮の薬局と西洋の医学技術として、患者たちを治療していたセブランス病院を例えとして比較しながら、(たとえ、意図したことではないが) 朝鮮の非近代的な要素を間接的に批判している。ランバス自身も医者なので、医術を見ている目は誰より深かっただろう。しかし、ここには医学技術を含め、西欧文物が相対的に優秀だという考えが無意識的に入っているとと言える。

一般的に、当時の西欧の宣教師たちはアングロサクソンの世界に普遍的に広がっていた人種的

な偏見と西欧及びキリスト教中心の世界観などを持っていた。これを他の表現として言ってみると、東洋を劣等な「他者」として取り扱いながら、東洋に対する西洋のヘゲモニーを確立する機能を遂行すると主張した、いわゆる、オリエンタリズム (Orientalism) と同じである。⁽³⁸⁾ ランバスが朝鮮文化を尊重し、朝鮮の歴史を理解しようとした姿勢を示していたので、必ずしも露骨なオリエンタリズムの中にいたわけではないが、西洋人のベースとして、西欧文物の優越的な観念があつたと言えるであろう。

しかし、前に言及したように、ランバスは朝鮮の伝統文化を理解しようと努力し、その内に、自分が観察し、迷信的な要素、非人倫的、非近代的な要素を西洋文物によって、改善しようとしたので、オリエンタリズムに入っていた程度の大きさは非常に少なかったと言える。それにもかかわらず、その程度の差があるだけで、朝鮮の中に西欧文物を加え、近代化を果たすべきだという彼の考えは変わらなかった。

5. キリスト教の福音が必要な国

ランバスが宣教局の主事として在任していた一八九四年、朝鮮を米国の南メソヂスト監督教会に紹介するために書いた文章を読んでもみると、最後のところに朝鮮をめぐって次のように言及していることがわかる。

朝鮮は何も言わない処方が必要とする。その混乱は慢性であり、たまに、急性の悪化の症状を見せること

もある。効力なしの彼らの医者たちによる果敢な措置が前の何世紀の間に試みられてきた。いわゆる、外科(surgical)的な手順「手術」による「列強たちの朝鮮半島の」分割は関係がある皆に大きな失敗を与えられることを証明するだろう。ロシアという熊は永興湾(Port Lazareff)の根拠地を出してくれ、そのロシアという熊は捕獲物の手段を探しながら、アジアの東方の全体のを分割するだろう。…東洋の明朗な性格のフランスと言えるが、きめがきれいで、細かく構成されている「朝鮮は」取り扱いにくい重さと豊かな資源を持っているのに、仕方なく無気力な気質とのんきな精神の「力のない巨人」として、彼ら自らを疲弊させている。⁽³⁹⁾

迷信的な要素を持っているし、近代化されなかった朝鮮。しかも、外勢の侵略のため、苦しんでいる朝鮮。従って、急変している当時の時代的な潮流の中で、朝鮮は変化を要すると思った。勿論、朝鮮の指導者と国民が自ら多様な措置と方法を取り扱いながら、変えようとしても、ランバスはその間に、変化しようとした朝鮮のあがきが結局失敗してしまったと見なしている。それで、彼は引き続き自分が考えている解決策を次のように提示する。

キリスト教の国々による仲裁(arbitration)が一つ目の機会を与えることができると思う。アジアの国々は西欧文明の背景にある福音の伝道(the gospel forces)の具体的な表現の内に与えられている。朝鮮は十字架の宣教師たちによって、移植されているためその根源から新たな命を促進させ、その政策によって、国民を無理なく導くことになるだろうし、古い文明の中心点(hinge)となり、近代化への道を辿ることになる、と思う。⁽⁴⁰⁾

要約してみると、キリスト教国による仲裁がベースになることが必要であり、そのベースの上

に、西欧文明と福音伝道が行われるべきだと主張する。自然に近代化も成されるようになることなのである。これは程度の差があるだけで、当時に、東洋に來た西洋（米国中心の）宣教師たちの典型的な姿であった。ところが、元々のランバスの見解では、朝鮮は「heathen」国の中の一つであった。⁽⁴⁾これは二つの意味を持っているが、一つ目は、「未開な」国という意味であり、二つ目は、「異教徒」の国を示す。すなわち、西欧文物を通して、朝鮮の文明化という観点で見れば、「未開な」国であると解釈できるが、二つ目の見解では、朝鮮にキリスト教の福音が要る状況を示す表現であると思える。この両方が朝鮮に必要な要素であると彼は主張する。しかし、ランバスが晩年に見た朝鮮はむしろ朝鮮人の方が自らキリスト教に目を向け、福音に興味を持つことになると思った。次は、彼が一九二一年八月に東洋に出発する前、朝鮮をめぐって、書いた文章の一部である。

宗教的なアニミズムに大きな力量を持っている朝鮮人は崇拜において、彼らは原始的な努力をする。これは悪霊（evil spirits）の贖罪から、彼らを何世紀の間に導き、彼らを多くの迷信的な行為として締めつけた。彼らは仏教に熱心だったが、僧たちは不正と腐敗のため、悪名が高かったし、生活と民衆の中心部から追い出された理由で、悲観主義から希望に、そして不道德から正義に変えたいと思った彼らの欲求がつづいている。結局、失敗してしまった。彼らは儒教にも力を合わせたが、それは活力を吹き入れるところか、ただ崇拜することに終わってしまった。今、朝鮮人たちはキリスト教に目を向け、「何か良いことがあるのか。もし、そうだったら僕をそこまで、連れて行きなさい。飢える僕の心を満たすことができるような、何かを見つけるべきである。」⁽⁴⁾と言う。

この文章はランバスが晩年に残した朝鮮に関する最後の公式的なもので、彼は朝鮮の歴史と社会の中で、アニミズム、仏教、儒教が成せず、結局、失敗をしてしまったと判断した。その結果、朝鮮人たちはキリスト教に興味を持つようになったと見たわけである。このように、ランバスは朝鮮の社会の中で、キリスト教の役割が重要であると見たので、彼は次のようないくつかの姿勢を頼み、提示する。

この「宣教」現場が収穫まで至ることは本当に確実であるが、この時間の中に我々がすべきな義務とは何なのか。とりあえず、罪から救われる福音宣教を続け、もっと広く説教することである。二つ目、男女の若者たちが自らの人生を献げることができるよう、イエス・キリストの御言葉を強調する。三つ目、効率的な使命が行われるように、説教と教えによって、切に人々に訴えることである。四つ目、聖霊の臨在と御業のため、祈ることができるよう、すべての教会に願う。そして、五つ目、イエスは皆を救うことができるし、必ず救うということ、皆が聞き、わかるように、その十分な機会を我が宣教部の区域 (territory) の成人男女の大人たちと子供たちに至るまで、この福音伝道の運動を止めないように計画し、強調すべきである。⁽⁴⁾

ランバスは朝鮮に福音を順調に伝えるため、罪から救われる福音、イエス・キリストの御言葉の強調、説教と教えによる切なる訴え、聖霊の臨在と御業のための祈り、皆が救われるような事実の強調など、この五つを大事に考えなければならぬと見た。このように、ランバスは晩年まで、朝鮮にキリストの福音の伝道と拡張が要るし、これからこのため、力を注いでいく立場を堅持した。朝鮮にとつては必要不可欠のものは福音そのものであると彼は確信した。

6. 朝鮮教会の熱心と自立に関する評価

ランパスが晩年まで、朝鮮に関する関心を持つことができたのは朝鮮教会の可能性に注視したためであった。特に、彼は朝鮮教会の熱意を高く評価した。ところが、それは元々朝鮮の自然環境と共に続いてきた外勢の侵略による苦痛を経験したことの中に、朝鮮人の独立精神が宿っていると見ていた。

朝鮮人たちは多くの苦痛を耐えてきた。…苦痛は「私たちを」もつと訓練させる先生のようなことであるが、万一、心を開示して、学生たちに苦難に耐える教育訓練をめざしていれば指導し易くなることは、自明の理である。「彼らは国がない人である。」しかし、もし、彼らの市民権が天にあるという表現はあまり良くない！朝鮮人たちの教育と進歩に向かう欲求は成長してくる。何ゆえの自己表現 (self-expression) かも身につくし、真理は人を自由にし、相互に尊敬の念を抱くに至る。これは、最初から宣教師が持つ有利な点と言える。政治と交易 (commerce) の面での国家表現として他の手段は朝鮮自らほとんど遮断されてしまった、と言ってよい。朝鮮の民衆は心中から、霊的な欲求を満たすだけでなく、その向上心を保持するよう最大の実力を払っている。⁽⁴⁵⁾

長い間、苦痛を耐えてきた朝鮮人たちは、その中に、独立精神が育ち、同時に、教育と進歩に対する関心と欲求、つまり、朝鮮人たちの熱心がますます成長していったと考えた。ところが、その熱心は世のことではなく、いわゆる、上を向く熱心の渴望として現れたのである。ランパスは、これがキリスト教につながる時に現れる可能性であると期待した。

朝鮮人たちがキリスト者となれば、すぐ彼らの中に悟りを開き、学びの欲求を持つようになるだろう。もし、文字も読めない無学な者だったら、彼は聖書を理解するため、読むことを学ぼうとするだろう。彼は真面目に聖書を勉強し、「その御言葉を」愛するようになるだろう。これは彼にとって、一つの偉大な本である。聖書勉強会 (Bible classes) を組織し、学び続けるのも、大きな問題とならないだろう。聖書協会の職員 (Bible Society Agent) と宣教師たちの協力は御言葉が広く普及されるようにできる。従って、行くにくい所々の町にも福音伝道の道が浸透するのである。⁽⁴⁶⁾

単に、キリスト者となることだけではなく、聖書を探求する熱心に続き、さらに、聖書勉強会の組織、聖書協会の働きが盛んになり、伝道への熱意が伸びてゆく朝鮮人たちの姿をみてランバスは称賛している。時折、朝鮮教会の信徒がわざわざ自分に会うため、遠いところから歩いてきたことも、ランバスにとっては朝鮮教会の驚くべき熱心の表れと見ている。⁽⁴⁷⁾ このように、朝鮮教会の熱心さと自発的なボランティア精神は、ランバスにとってこの他印象的に心に刻まれたのであった。一九一九年頃から推進されてきた米国の南北メソヂスト監督教会の宣教百年記念運動が、朝鮮で行われていく状況を見て、朝鮮教会が積極的に献身している姿に誰よりも肯定的に評価した。

宣教百年記念運動のプログラムに協力することにおいて、朝鮮のキリスト者たちが喜んで自ら願ひ出て、献身する心は非常に意味がある。これは私たちに与えられた「宣教の」現場に囲まれている努力が結実し、平和裡に福音を伝える貴い証しを立てている共同の働きが熱心になされ、信徒たちの信仰と熱意によって、初心者

たちが喜んで自ら願ひ出ることによつて、積極的にその働きを囑望し、教会を建てるために、時々一ドルあるいは二ドルを献金したり、時には全財産を捧げる篤志家が現れるのも珍しくない。自由に献金することによつて、「キリスト教の」学校教育の発展に関心を抱き、教育訓練に喜んで参与することを喜びとしているのである。⁽⁴⁸⁾

ランバスが見た朝鮮教会の熱心な姿は喜んで献身する姿であり、さらに、朝鮮教会が宣教師を含め、他人に頼るより、自ら問題を解決しようとする姿に他ならなかったのである。自らの信仰の共同体、そして、教会を建てるために、一、二ドルという小さなお金から、時折、全財産を捧げる朝鮮教会の姿がランバスにとっては、衝撃的だったわけである。そのように、朝鮮教会の熱心は自立意識を喚起し、そのベースになった。中でも、ランバスが見た朝鮮教会の女性たちは自立意識が強い女性であった。ランバスが朝鮮でのスケジュールを終え、米国に戻る時に、朝鮮教会の女性たちに頼まれたことがあった。

「ランバスによると」朝鮮のあるところで、礼拝堂を建てるため、寄付金を要請したが、朝鮮教会の婦人たちが銀指環の七つをくれたが、それを米国に持ち帰り、その事情を言ったところ、一つは一、〇〇〇円、もう一つは五〇〇円の代価で買い取ってくれて、朝鮮に送ったし、五つはまだあるそうだ。⁽⁴⁹⁾

朝鮮教会がランバスに礼拝堂の建築を頼んだことではなく、むしろ、ランバスが朝鮮教会に礼拝堂の建築を頼んだのである。元々、宣教地の人々は宣教師とその背後にある本国教会の豊かな財力に頼ることが普通であるが、ランバスは朝鮮で、その逆の状況を見ていたのである。それほ

ど、ランバスが朝鮮教会の自立意識が芽生えていることがわかっていたので、それは可能なことであつた。従つて、彼は朝鮮教会の女性たちが自らの教会の建築基金を準備するため、自分にくれた銀指環を米国に持つて戻り、それを売り、お金を朝鮮にまた送つたのである。このような朝鮮教会の自立意識について、ランバスは米国で発行されていた南メソヂスト監督教会の機関紙を通して積極的に紹介している。

朝鮮教会におけるすべての「宣教」事業はもはや自力運営 (self-supporting) の状態である。まだ、朝鮮人の多くが肉の一切れすら食べられずに、かなり苦勞して生活しているのに、教会のすべての献金は毎年の総額の二二五、〇〇〇ドルを超過している。朝鮮の男性たちは、耕す牛を売れば、礼拝堂を建てることができるということを知っている。また、朝鮮の女性たちは、自らの結婚指輪を献げたり、髪を切つて売つたりするが、それは福音を伝えるために使われる。そして、朝鮮教会の信徒の 1/6 が完全に信仰訓練会 (Bible training center) に入っているが、彼らはキリストのため、勝利の証しを立てるため与えられたこの世の仕事に精一杯働き、個人的にも使命を感じ得るようになる。⁽⁵⁾

教会を建てるために大事な財産の牛を売つたり、福音の伝道に効果的に用いられるような資金を準備するため、自らの貴重な結婚指輪を献げたり、髪を切つて売つたりする朝鮮教会の姿は、ランバスが米国教会に紹介しても誇りとなるものであつた。まさに、これらすべてのことが朝鮮人たちの独立意識を掻きたて、熱心で持続的な信仰生活が自立意識につながつていたのである。そのようなわけで、ランバスが「朝鮮人たちのキリスト教の信仰は世界の一番であり、朝鮮で復

興しているキリスト教の状況を直接見ても、朝鮮人は神が選ばれ、将来的に東洋を救済に導くものとなる」と神への賛美を高唱するのであった。

結び

今日、韓国で、ランバスの研究は皆無といっても過言ではない。それにもかかわらず、ランバスと韓国（朝鮮）の関係を研究する必要性があるのは、彼が南メソヂスト監督教会宣教局の主事として、そして、（東洋担当）監督として、朝鮮と一貫した関係を結んでいるからである。このため、彼は朝鮮が単にアジアの一つの国、つまり、中国と日本の間にある国としての認識から抜け出して、キリストの福音を伝えるため、かなり関心を持つことができるようになった。

確かに、彼は西欧文物が優秀であり、優越観を持っていた西洋人の側面がなくてはなかったが、その考えの程度は他の一般の西洋人に比べて格段に弱く、できるだけ朝鮮の歴史と文化を理解しようとしたと言える。すなわち、彼は可能な限り、宣教師として良心的な観点を維持しようとした。それ故、日本の植民地の時代に、総督府の官吏たちの顔色を気にせず、独立運動のため、苦しみ、喘いでいた朝鮮人たちを慰めることができたし、直接、刑務所を訪れる姿も見せることができた。このように、朝鮮と朝鮮人たちに関する深い理解が行動として明らかに現れるようになったとも言えるのである。

また、ランバスは朝鮮教会の熱心と自立意識を見て、大きな感動を受け、このことを米国に紹介し、本国教会を鼓舞しようとしたこともある。この意味で、彼は一方的に何かを与えるだけの

宣教師ではなく、互いに影響を与え、受け取るような形の宣教の姿を示したと言える。このように、ランバスが朝鮮と朝鮮人に関して持っていた認識と理解は、今日の世界の各地で活動している宣教師たちに、宣教地と宣教地の人々に接する正しい態度と行動がいかなるものかを改めて問い直し、海中に眠る真珠よりも貴い神の知恵と、その深い意味を伝えてくれているのである。(終)

【注】

(1) ランバスと朝鮮との関係をテーマとして研究した論文は、洪伊杓の「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島―永遠なる東アジアの友」が唯一である。(『関西学院史紀要』第十七号、二〇一一年、九一―一二頁)。

(2) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, *The Methodist Review* (以下 MR), Nov-Dem, 1894, pp. 204-210.

(3) 尹致昊の日記にランバスが出てくる部分は一八八八年一〇月三日、八八年一〇月四日、九〇年二月一七日、九一年四月一〇日、九一年四月一四日、九一年一〇月二三日、九一年一〇月二四日、九三年九月一四日、九三年九月一五日、九四年六月二五日などがある。

(4) 『尹致昊日記』(一八八八年一〇月三日、九一年一〇月二四日、九三年九月一五日)。

(5) 尹致昊は日記で、彼がランバス夫婦と共に食事しながら、ランバス夫人が話した内容を記録しているが、この際に共にいた三人の対話のテーマが中国あるいは日本となったことは推測できる。従って、その意味で、ランバスやはりこの際に、尹致昊と共に関連のテーマで対話しながら、食事したはずである。

- (6) 『尹致昊日記』(一八九一年四月一〇日、九一年四月一四日)。
- (7) 『尹致昊日記』(一八九一年四月一〇日)。
- (8) 洪伊杓は、その論文で、この際にランパスがアンダーウッドと共に朝鮮宣教のため、支援講演をしたと言及しているが、これは事実ではない。この日、ランパスは日本と日本の宣教活動について言及しただけで、朝鮮をテーマで講演したことではなかった。(洪伊杓「W・R・ランパス宣教師と朝鮮半島―永遠なる東アジアの友―」、一〇一一―一〇四頁)。「尹致昊日記」の原文は次のようである。Rev. Hugh Price Hughes addressed the students in the chapel at 9 a.m. In the afternoon session Dr. Lambuth spoke on Japan and its missionary works with his usual earnestness and clearness. Rev. Underwood, Corea, followed Dr. Lambuth. Then a short talk by Rev. H. P. Beach, Doctor of Divinity, a returned missionary from China.『尹致昊日記』(一八九一年一〇月二三日)。
- (9) 尹致昊の日記によると、一八九四年の夏頃まで、ランパスと尹致昊の間に、手紙が交わされたことは一八八八年一〇月三日と九〇年二月一七日、ただ二回しかなかった。勿論、一定のよしみを維持していた二人の関係を考慮すれば、何回かの手紙が互いに交わされたと考えられる。『尹致昊日記』(一八八八年一〇月三日、九〇年二月一七日)。
- (10) 代表的に米長老派 (Presbyterian Church of USA) と北メソヂスト 監督教会 (Methodist Episcopal Church) が、既に一八八四―一八八五年の間にアレン(Horace N. Allen)とアンダーウッド(Horace G. Underwood)・アッペンツェラー(Henry G. Appenzeller)・スクラントン(William B. Scranton)などの開拓宣教師を派遣し、宣教活動を始めていた。
- (11) 勿論当時に彼が参考にした朝鮮をめぐる書籍はグリフィス(W. E. Griffiths)やレイン(J. J. Rein)やステイブンス(D. W. Stevens)などの日本で活動した宣教師あるいは駐在員によって、著述された書籍などが主になった。そのようなわけで、初期に、彼が持っていた朝鮮をめぐる知識

- と理解は日本偏向的な理解が一部見られる。W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, MR, Nov-Dem, 1894, pp. 205-206, 208-209.
- (12) その関心が結果として表出されたのが、*The Methodist Review* に掲載された Korea: Past and Present への彼の文章である。Ibid, pp. 204-210.
- (13) Ibid, 1894, p. 206.
- (14) W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, Nashville: Publishing House of the Methodist Episcopal Church, 1908, p.108.
- (15) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, MR, Nov-Dem, 1894, pp. 205-206.
- (16) W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.94-95.
- (17) Ibid, pp.96-97.
- (18) Ibid, pp.99-100.
- (19) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, p. 207.
- (20) W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.99-100.
- (21) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, p. 206.
- (22) Ibid, pp. 207-208.
- (23) W. R. Lambuth, Korea Ripe for Evangelism, *The Korea Mission Field* (新韓民報), Feb. 1922, p. 25.
- (24) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, pp. 209-210.
- (25) Ibid, p. 204.
- (26) 『尹致昊日記』(一九一九年九月八日)。
- (27) 『新韓民報』(一九二〇年七月二九日)。
- (28) 『東亜日報』(一九二〇年九月一九日)。
- (29) 『新韓民報』(一九二一年六月三〇日)。

- (30) 渡辺理恵（ウラジオストクの総領事代理領事）が内田康（外務大臣）に届けた文章（一九二二年八月二一日の發送）。
- (31) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, p. 207.
- (32) W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.90.
- (33) 「heathen」という言葉は「未開な」という意味の以外にも、「異教徒」という意味もあるが、文脈で読めば「未開な」の意味も十分入っていることがわかる。
- (34) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, p. 210.
- (35) Ibid, p. 210.
- (36) W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.97.
- (37) Ibid, p.97.
- (38) Edward W. Said, *Orientalism*, New York: Vintage Book, 1979.
- (39) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, p. 210.
- (40) Ibid, p. 210.
- (41) W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.97.
- (42) W. R. Lambuth, Korea Ripe for Evangelism, p. 25.
- (43) Ibid, pp. 25-26.
- (44) W. R. Lambuth, Korea: Past and Present, p. 214; W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.108.
- (45) W. R. Lambuth, Korea Ripe for Evangelism, 1922, p. 25.
- (46) Ibid, pp. 25.
- (47) W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.103-104.
- (48) W. R. Lambuth, Korea Ripe for Evangelism, pp. 25.
- (49) 『公立新報』（一九〇八年八月二六日）。

(50) W. R. Lambuth, Book Reviews—Men and Mission, *The Methodist Review Quarterly*, Apr. 1910, pp. 382-383.

(51) 『新韓民報』(一九二一年六月三〇日)。